岩波講座　日本歴史

平安朝の女流日記

吉沢義則

國史研究會編輯　岩波講座　日本歴史

平安朝の女流日記文學

吉澤義則

岩波書店

平安朝の女流日記文學

吉澤義則

目次

序

こゝに云ふ日記文學とは史家の以て史實の資料とする宮廷とか官廳とか、若しくは諸家の其の日〳〵の干支、晴曇、公事、年中行事等の記錄を指すものではない。此等の日錄は故實先例を尊重する時代意識から忠實に記錄され、保存されたものであり、諸家の所謂家記は、家を重んじる事からやがて他見を禁じ、祕藏したものである。中右記や今鏡等に云ふ「日記家」「にきの家」とは全く、有職故實の家柄を指すもので、先例による儀式典禮が、政務の殆ど全部であつた當代に於ては廷臣中甚だ重んぜられたものである。卽ち此等の記錄（日記）はその製作動機が、ある外部的の目的に在る爲に、巨細に記述されて、全く事務的な覺書や備忘錄に終り、無味乾燥なのが多いのもやむを得まい。又、其の筆錄者は男子であるから所謂「男文字」なる漢字で書かれてゐる事は云ふまでもない。今こゝに云ふ女流日記文學は、勿論「女文字」なる假名文で、旣に假名を自由に驅使し得るまでに至つた女性が、それを用ひて、自己の體驗を回顧し批判する事によつて生じたやむにやまれぬ表現欲からものした切實なる人生記錄であつて、それだけ個性的であり、又、文學と名づけられる所以のものである。從つて作者自身に就いて云へば、その執筆期は、中、老年期で、自己の體驗の回顧であり、告白であるだけに思索的傾向を持ち、そこに作者の精神生活を求める事が可能であると思ふ。筆者が女流日記文學を通して女流生活を見る事に重きを置かうとするのもこゝにその理由がある。同時に自己の

體驗がその對象となるのであるから空想的分子が少く、且つ時間的順序の制約も受けて敍述されねばならない。この點歴史との關係も見られるのであるが、資料としての價値の高低は文學としてのそれとは反比例しなければならない。

以下論じようとする女流日記文學作品の中のものが、現存する假名文の日記文學の最初のものでなく、貫之の土佐日記を以て始まるのであるが本題下に於ては、この日記は、勿論「いぬぼし」「篁日記」「高光日記」等男子の手になる作品には觸れない。尙又、日記と家集、歌物語との關係は非常に密接で、篁日記が篁集とも、篁物語とも、伊勢集が伊勢日記、和泉式部日記が和泉式部物語、伊勢物語及び、多武峯少將物語、平仲物語が夫々、在五中將日記、高光日記、平仲日記、貞文日記と呼ばれてゐるのはこの間の消息を語るものであつて、この三者の關係は興味ある問題であり、また伊勢集より筆を起すべきものであらうが頁數の都合もあるから、暫く在來女流の日記文學として取扱はれて來た主な作品に限つて簡單に紹介して見ようと思ふ。

蜻蛉日記

東三條太政大臣兼家の室、右大將道綱の母の著で、大鏡卷五太政大臣兼家の條に、

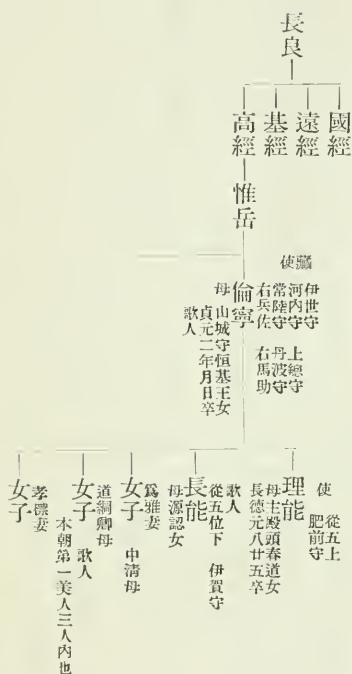
次郎君は、陸奥守倫寧ぬしの女の腹におはせし君なり。道綱と聞えし。大納言までなりて右大將をかけたまへりき。この母君、きはめたる和歌の上手におはしければ、この殿の通はせ給ひけるほどの事、歌など書き集めて、かげろふの日記と名づけて世に廣め給へり。

と見えてゐる。流布本は三卷三冊（元祿十年 文政元年）又は、八冊（寶曆六年）である。此等は他の無刊記本と共に皆同一板本によつた

ものである。日記の名稱は上卷の終りに、

なほ物はかなきを思へば、あるかなきかの心地ぞする。かげろふの日記といふべし。

に由つたものである。從つて、作者自身が附けたものと見るべきであらう。また、かげろふに就いては、蜻蛉とする說もあるが倘陽炎と解すべきであらう。

作者の父倫寧は、河內、伊勢、丹波、陸奥守等に任ぜられ（尊卑分脈、大鏡、日記、長能集）、兄弟の一人長能は伊勢守（作者部類、歌仙傳）となり、有名な歌人で長能集を殘し、能因法師はその弟子と云はれる。更級日記の作者の母もまたこの妹である。從つて、作者は先天的に藝術的素質に惠まれてゐたといふべく、長能の如きは藝術的良心最も強く、その詠歌を公任に批難せられて悶死したと云はれ、更級日記の著者も、讃岐典侍もこの家より出てゐる。この系譜を尊卑分脈その他から要出すると

道綱の母は、名は固より傳記も全く不明である。生年も兼家の通ひ初めた天暦八年に（日記參照）彼が二十六歳であつた事から推して當時を假に二十歳前後と推定し、その誕生を承平五、六年とする以外に手懸りがなく、歿年は長徳元年五月二日であるらしい事は、小右記の翌二年五月二日の條に、

新中納言道綱亡母周忌法事

とあるによつて略ゝ知られるのみである。百人一首一夕話、類聚名物考の記載もこの日記の範圍を出るものではない。

道綱が作者の實子である事は日記の語る所であるが、或は兼家の四男（日記系圖）、三男（尊卑分脈）とし或は一男（榮華物語事蹟考勘）、二男（大鏡短觀抄）とするが、矢張前掲大鏡の說が妥當である。その幼時の性格はこの日記によく見えてゐるし、續古事談にある、後一條天皇の御幼時に、帝にお勸めして金を砂上に撒き、それを懷中にして歸つた話なども知られてゐる。

日記の記事は、天暦八年秋、兼家二十六歳の頃通ひ初めた當時の和歌贈答の事に筆をおこしてある。翌九年、一子道綱の誕生を見るのであるが、早くも兼家の愛は薄くなり、そこに作者の懊惱と嫉妬に滿ちた愛憎の生活があり、最後に母として子への愛に目覺めてゆく切實な人生が告白され、描かれてゐる。そして天延二年兼家の四十六歳頃に終る約二十一年間に及んでゐるが、既に述べた如く、女流日記はその日〳〵に書かれたものでなく、寧ろ自分の歩んで來た道を回顧し凝視するによつて、思ひにあまつた事を筆にしたものであるから、時により處により記述に精粗のあるは當然であらう。記事中、天德二年、四年、應和元年の三年間が闕けてゐるが、この理由を兼家の父九條師輔薨去の爲、作者と兼家との交渉の少なかつた事に置く說（蜻蛉日記解環及藤岡東圃博士說）があるが、直ちに首肯し得ない。又天祿二、三年の記述が最も詳細であるから、まづこの頃起筆したものかとも推定されるが、或は更級日記の如く、記事の終つた天延

二年以後に筆を執つたものであるかも知れない。とまれ日記の書出しの部分から見て、これを公にせんとする意圖のあつた事は充分推測される。

長能は歌人として餘りに有名であるが、道綱の母も亦當時既に知られた歌人であつて、寛和二年の內裏歌會に出席し（日記卷末附錄 拾遺集二夏）、清少納言さへその著枕草子に、

まだをのと（前田家ふのと）の母上こそは、普門寺といふ所に、八講しけるをきゝて、またの日、小野殿に人々あつまりて、あそびし、文つくりけるに、

たきゞこる事はきのふにつきにしをけふは斧の柄こゝにくたさむ

とよみ給ひけんこそめでたけれ。

（この歌は猶、拾遺集二十、日記卷末附錄、傳大納言母集及び道綱母集參照）と云ひ、前掲の大鏡にも「この君きはめたる和歌の上手におはしければ」と云ふ。又後世如何に歌人間に敬慕されたかは、寛和二年の內裏歌會の郭公の歌が、清輔の袋草紙卷三に、貫之、公忠、兼盛、實方の歌と共に「郭公秀歌に五首なり」と推稱し後世の範としてゐる事でも知られよう。勅撰集に收められた歌數も少くなく、作者部類によると拾遺集以下新千載集まで三十九首である。作者が貞節にして才色兼備な婦人であつた事は日記自身の示すところであるが、また尊卑分脈に「本朝第一美人三人內也」とあるのは、後世の臆説にしても、猶日記天祿元年大嘗會の御禊見物の條に、

これやかれや、いでなほ人にすぐれ給へり、よしあなあたらしなどいふめり。

と見えてゐる事より、唯臆説とのみは云はれまい。

作者の夫兼家の事は、今更こゝに論じる要はないが、唯この日記には道綱の母に通ひ初めた二十六歳頃より二十一年間の彼が描かれてゐるのであつて、こゝに見る彼は、史實に現れた血も涙もない攝關爭奪の權化の彼とは全く異つてゐる事だけは言はなければならないと思ふ。貴公子に有勝な一本氣の激情や、氣まぐれな我儘と好色さがあると同時に、父として子への愛も、男として女に對する情の脆ろさ等も窺はれて、人間兼家の姿があるがまゝに寫されてゐる。

王朝時代の結婚制度それ自身に孕まれてゐる矛盾に就いては言はずもがなであるが、認められてゐた一夫多妻の制度は男が權力を得る爲の必然の產物でゞもあつて、その結果、權門出の妻に男の愛の移るのも又やむを得ない事である。

兼家には幾多の妻があつた。明かなものだけでも、道隆、道兼、道長、超子、詮子を生んだ攝津守藤原仲正の女(大鏡、榮華)、尙侍綏子の母である故皇太后權大夫國章の女(榮華、尊卑分脈、一代要記)及び源宰相兼忠の女があり、日記天祿二年、榮華物語花山卷によつて小野宮實頼の召人近江、超子の女房大輔に通つた事も知られるし、他にも二三推測されるものがある。

僅かに一國守倫寧の女にして、且つ、兼家とは全く相反した內氣な、その癖氣の勝つた道綱の母の家庭生活の煩悶が、こゝに由來するのは當然と言はなければならない。

以下道綱の母の步んだ道を概觀して見よう。天曆八年、貴公子兼家との間に成立した戀愛から結婚への生活は、彼女をして新しい人生の夢に醉はしめたが、翌九年八月道綱さへ儲けるに至つたその頃、早くも兼家の不在中に箱の中

から兼家が他の女に宛てた懸想文を見出でて、はつきりと裏切られてゐた事を知るのである。裏切られた戀愛の苦惱はこゝに芽生え、心の底深く根を張つて行くのである。若く、それだけ純な作者は愛する故の憎しみと片意地と嫉妬から、人をして兼家の後をつけさせて町の女の家を發見させたり、或時は兼家の來訪である事を知りつゝも意地から門をも開けず、男を歸らせて後、淋しさに遣瀬なく、

歎きつゝ獨りぬる夜のあくる間は如何に久しきものとかは知る。

の歌を贈らずにはゐられなかつたり、町の女と兼家の絶えた事を聞いて自分の身につまされて同情を訴へたりする。しかも町の女の男の子の生産にあらはな嫉妬を感じ、その子の死を聞いて溜飲を下げたりしてゐるが、既に人の子の母となつてゐる彼女は、片言雜りに物言ふ樣になつた道綱（天德二年道綱四歳）に無意識ながら人間性に觸れたものを感じたり、自分の周圍の自然に目を向ける樣になつて、夕暮の蜩の聲にも、薄のそよぎにもそつと心を沈ませる樣になつて來てゐる。天德三、四年、應和元年は闕けてゐる。應和三年正月三日兼家が昇殿を許された事も、この作者の心を動かさなかつた。康保元年母の死に逢つた作者は、道綱と共に山寺に籠り母の追憶に耽つた事もあり、兼家も可成親切に訪れてゐる。同二年には賴もしき人（父とも姉とも云ふ）が任國下向してゐる。此等骨肉との死別生別は可成切實なものを彼女に感ぜしめた事と思はれる。康保三年頃より、殊に天祿よりの記事は、女性として、又妻として、戀人であり夫である兼家に對して、三十を過ぎた作者の複雜な心理描寫が見え、記事も精密である。蜻蛉日記の主要部分はこの邊にあるやうである。兼家の胸に取り縋つて、思ふ存分泣かまほしきまで思ひつゝも、兼家に逢へば心にもなく反抗する。背かれ、僞られ、飜弄されてゐるのだと思ふ心が勃然として起り、兼家が、優しい言葉を掛けると

益〻反抗したくなる。常に「あさましき人」、「絶えにし人」、「音なき人」、「ことたえたる人」と怨んである。男の愛を獨占し得ない不安と焦慮とで一杯なのである。懊惱の極、安和元年初瀨詣をする。昔は佛いぢりをする人を「まさり顏な、さる者ぞやもめになるてふ」などゝ非難した彼女が今や「もどきし心はいづち行きけむ」と反省して何か超人間的な力に賴らうとする心的變化は注意すべきであらう。前年兵衞佐なる人法師になり、作者と「文かよはしなする」ほどの中だつたその妻が亦尼になり、安和二年には西宮左大臣が流罪に處せられる。此等の事柄は可成作者の心に響いてゐる。この年水無月、兼家が十五歲の道綱を伴れて御嶽詣をするが、その留守中、道綱の安否をのみひたすら氣遣ふ彼女は、既に夫より子への愛に目覺めて來てゐる事を明かに思はせずには措かない。天祿元年六月辛崎に旅をする。八月道綱の元服には、死なん、さまをかへんと願つた怨みも忘れて、嬉々として兼家と共にその仕度をする。この年の記事は充實してゐるし、作者の心境も複雜である。物詣や參籠の場合とは云へ、作者獨自の自然鑑賞とその描寫が見られる。天祿二年六月鳴瀧に籠つたのは、只單に表面に表れた兼家への反抗の爲とばかりは云ひ得まい。この前後より作者の心境は餘程信仰的なものに傾いてゐる。頭を剃つた夢、胎内に蛇がゐて內臟を食べたりする夢、等暗示的な夢を見た。之等は深く作者の關心を把へ、死に對する考へなども述べられてゐる。かくして兼家に對しても第三者の目を以て對する樣になり、兼家の妻妾の一人である兼忠の女の腹に出來た子を養女とし、その養育に碎心するまでのゆとりある氣持になつて來てゐる。

天延元年頃より記事漸く疎になり、客觀的に世上の出來事を記し、翌二年十一月道綱が臨時の祭の舞人となつたのを母らしい誇りと喜びを以て見物し、この暮で日記は終つてゐる。

以上がこの日記の概括的素描であるが、猶この日記の唯一の註釋書たる坂徵の蜻蛉日記解環（十八冊天明五年刊）にあげられた年立を參照するのが便利である。先頃の全譯王朝文學叢書中に通釋が收めてある。

一體この日記は錯簡、誤脫が甚しく、且つ難解な所も多い爲、意味の全く不明な所があり、又旣に述べる如く流布本系統以外のものがなくて、現在に於てはその誤謬を訂正し得ないのであるが、それにも拘らず我々の心を强く打つのは、この日記が王朝に生きた一女性の妻、母としての苦惱の實歷史であると同時に、又この時代の凡ての女性のそれであるからである。要するに作者は、この世の矛盾と苦惱に藻掻きつゝも、猶飽くまで人生に執し、それを慕ふ現世主義者であつた。さればこそ山に入つても安住し切れず、あまがへるの名を甘受して現實生活に立歸り、そこに母なる自分を見出し、その胸より湧く子への愛によつて先づ自分自身を救つて行つたのである。この精神こそまた彼女の藝術的天分と相俟つて、蜻蛉日記なる秀れた作品の母胎をなすものであると思ふ。

和泉式部日記

この日記一卷は、第三人稱で書かれてゐる爲、和泉式部物語とも呼ばれ、作者に就いても疑はれるのではあるが、色々の點から和泉式部の著作と見なければなるまい。

この日記は

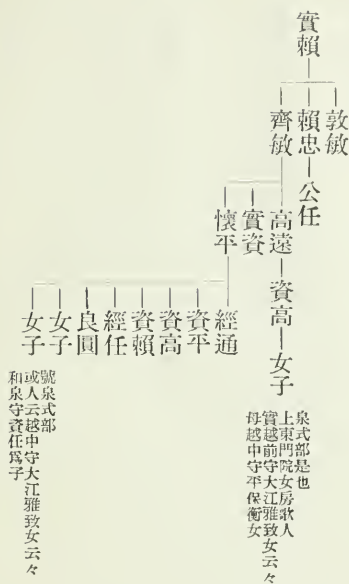
人の身も戀にはかへつ夏虫のあらはに燃ゆと見えぬばかりぞ

と歌つた不羈奔放の情熱歌人和泉式部が、その戀人彈正宮爲尊親王を長保四年六月十三日に失ひ、「夢よりもはかなき

世の中を歎きつゝ明かし暮」してゐたが、故宮の一週忌も濟まない同五年四月十日あまりの頃、故宮の同母弟帥宮敦道親王の戀を受入れた事に筆を起して、宮との戀愛生活を書いたもので、翌寛弘元年一月に終つてゐる僅か十一ヶ月足らずのものであるが、こゝに見られるものは王朝貴人の以て理想とした藝術美、情趣美の世界であり、それに生活する感激と氣分の生活である。

式部の傳記を說く前にその系譜を尊卑分脈と扶桑拾葉集所收のとから抄出して見よう。

先づ分脈には

實賴─┬─敦敏
　　　├─賴忠─公任
　　　└─齊敏─┬─高遠─資高─女子（泉式部是也　上東門院女房歌人　實越前守大江雅致女云々　母越中守平保衡女）
　　　　　　　├─實資
　　　　　　　└─懷平─┬─經通
　　　　　　　　　　　├─資平
　　　　　　　　　　　├─資高
　　　　　　　　　　　├─資賴
　　　　　　　　　　　├─經任
　　　　　　　　　　　├─良圓
　　　　　　　　　　　├─女子
　　　　　　　　　　　└─女子（號泉式部　或人云越中守大江雅致女云々　和泉守資任爲子）

拾葉集所收のものには

資高（從四位下　大宰大貳）──女（爲和泉守橘道貞妻、因稱和泉式部、上東門院女房、實越前守大江雅致女、資高養爲子、再醮藤保昌、母越中守平保衡女）

而して中古歌仙三十六人傳に式部の傳を述べて云ふ。

和泉式部越前守大江雅致女、或說權中納言懷平卿女云々、母越中守平保衡女、太皇太后宮昌子御乳母、號介內侍、和泉守橘道貞爲妻、仍號和泉式部、童名御許丸、上東門院女房。

以上によつて式部の父に就いては、藤原懷平說（尊卑分脈）、和泉守資任（同上）及び資高の養女說（扶桑拾葉集系圖）があるが何れも誤りで、猶越前守大江雅致說（尊卑分脈、拾遺和歌集哀傷、赤染衞門集、御堂關白記寬仁二年正月二十一日屛風歌の條、作者部類）を採るべきである。從つて王朝初期の碩學大江音人の裔で、匡衡、爲基、公資等皆この族より出てゐる事實から式部の文才の由來する所も知られよう。母は以上の記錄、殊に歌仙傳によつて、平保衡の女で、冷泉院皇后昌子內親王の御乳母で、介內侍と號したと知るが、只これ以外に知る由もない。又御乳母と云ふ點に就いては疑はれてゐるが、昌子內親王（朱雀天皇皇女、天曆四年降誕、三條太皇太后）に仕へた事實は、その夫郞ち式部の父雅致が、長保元年九月前後太皇太后宮昌子內親王の大進であり（小右記）、式部の夫郞ち橘道貞が恐らく式部の父の關係によつて、權大進を兼ねたと思はれる事（同九月廿二日）及び、この冬御不例中の昌子內親王が三條宮より所近き大進雅致の宅（實は道貞の三條宅であるが）に出でられ、そこでおかくれ遊ばされた事（同十二月五日。日本紀略十二月一日）等を考へれば略〻肯定される。そして式部は母と共にこの宮に過した。と言ふよりは式部と言ふ女房名よりしても、後に昌子內親王を御母と呼ばれた彈正宮、同母弟帥宮の寵を得た事より思つても寧ろ、この昌子內親王に仕へたと見るべきである。女房名は父の當時の官名から來たものであらう。

式部の生年は全く不明である。唯その經歷から推測して、先づ天祿前後頃かと思ふに止まる。御堂關白記（寬弘七年三月三十日）によると父雅致は木工頭越前守に任ぜられ、且つ道長に親しく恩顧を受けたらしい事は、その註「有二本司一、勤レ內、

度々依レ奉ニ仕造宮一任レ之」によつて知られる。後、式部が道長の女、上東門院彰子に奉仕した理由の一つも既にこゝに見られるのであつて、只、彼女の文才にのみその奉仕理由を置くのはどうかと思ふ。

和泉の名は、和泉守道貞の妻となつたからであつて（橘氏系圖、扶桑拾葉集系圖、尊卑分脈、詞花集、赤染衞門集、）道貞は長保の初頃より、その末年まで和泉守であつたかと思はれる（小右記同元年九月廿二日、權記同二年正月廿日、同記同六年正月五日、）。が式部との戀愛成立期は、彼が前記太皇太后宮權大進として式部の父大進の下に役を奉じてゐた前後と見るのが穩當であらう。そして道貞の役たる權大進と、式部がその妻となつた事には何か關係のあつた事は否めない。

道貞との間には、

大江山いくのゝ野は遠ければまだふみも見ず天の橋立。

の歌が有名な小式部内侍を儲けたにも拘らず、別れるに到るのであるが、道貞は武骨一點張りの荒々しきものではなく、陸奧守にて下つた時、たけくまの松を植ゑた風流人であり、道長に愛せられてゐる事などを思へば、別れるに到つた責は當然式部の性格が負はなければならないものである。彼女の家集（九）及び傳説によれば夫の任國和泉へも下つたらしいが、昌子内親王の許に育つた式部は田舍生活に甘んじなかつたのか、兎も角京に居り、彼女を廻つて多くの異性が集り、道貞の子を生んだ時すら、その親に就いて兎角の噂があつた（家集五）。此等の異性の中彼女の心を把へたのは、若くて美しく且つやんごとなき爲尊親王であつた。

冷泉天皇第三の皇子で、三條天皇の同母弟彈正尹爲尊親王は御性質「かろくおはし」「御かたちのうつくしげさははかりもしらずかゞやくとこそは見えさせ」（大鏡、兼家條）たが、貴公子の例に洩れず「色めかしうおはしましてよる夜なかわ

かぬ御ありき」（榮華物語、見果てぬ夢、鳥邊野、）された方であつた。式部が宮の寵を受けるに到つたのは、前に述べた昌子内親王が御繼母に當らせられることを云へば足りるが、宮が精神的に御不遇であらせられた事も考へなければならない。家集（續上）によれば、宮の御殿に上つて寵を受けてゐた。が彈正宮との關係は長く續かず「あさましかりつる御よあるきのしるしにや」（榮華物語、鳥邊野、）宮は長保四年六月十三日御年二十六で薨ぜられ、榮華物語の語る正妃（誠德公伊尹の女）御出家の悲劇がある。

式部の傷心は大きく、唯夢よりもはかなき世の中を歎きつゝ、無聊の獨居をつゞけてゐたが、翌五年の橘の花香る四月十日餘りのある日、故彈正宮に仕へ、式部も見知りであつて、今は故宮の御形見にと、宮の同母弟帥宮敦道親王に參つてゐる小舍人童の訪問を受けた。この童は帥宮の命を受けて、式部の許に橘の花——昔の人の袖の香ぞする——を持つて來たのである。式部は

かをる香によそふるよりは郭公聞かばや同じ聲やしたると、

の返歌を以て宮を誘ひ、宮亦

同じ枝に鳴きつゝをりし郭公聲は變らぬものと知らなん

と此に答へられた。日記はまづこゝに始まる。

帥宮敦道親王は、御父冷泉天皇、異母兄花山天皇、同母兄爲尊親王の御血を承けられて、才藻に惠まれ、容姿雙びなく、「世にありはつまじ」（家集）と自ら傷心される感傷家であらせられたゞけ、矢張多情にして、輕々しい御擧動もあつたらしく、正妃關白道隆の三の君との中も絕えられてゐた。

日記はこの帥宮との交渉に始まり、歌の贈答後、間もなく宮が式部の許に忍んで入らせられ、月明に托して家へ入らせられて契りを結ばれた。これは四月十日餘りの頃で(日記)彈正宮の一周忌も濟まない頃である。更に頻りに歌の贈答があるが、宮は流石に世評を憚られて、せめて「故宮の御はてまではいたうそしられじ」と愼まれゝば、「いとねんごろにおぼさぬぞ」と恨む式部であつた。これより宮の式部への愛は急速に進み、この年末頃宮は式部を南院に引取られてしまひ、二度目の正妃、大納言濟時の中君は宮の南院より小一條の祖母の許に歸られる迄に到つた(榮華初花)。日記はこゝで終つてゐるが、式部の求めて止まぬ愛欲の生活に終始してゐる。當時宮は二十三歳、式部は自ら「老いたる足」と告白してゐる如く、宮よりは可成の年上であつた。宮と式部との交渉の端緒は日記の說く所であるが、榮華物語初花は

和泉をは故彈正宮もいみじきものに思したりしかばかく帥宮もうけばりおぼすなりけり

と語つてゐる。道貞と絕えたのはこの前後の事であらう。夫大江匡衡と共にその任國尾張に居た赤染衛門は、歌を贈つて式部を責めてゐる。小式部內侍は母の手許に引き取られた。帥宮との關係はこの日記とその終りを一にしてゐるのではない。何故ならば、寬弘元年春の事か、帥宮は式部を伴れて、白河の公任の家に花見に行かれ、公任と歌を贈答されてゐるし(公任集、家集、新古今集雜上)、大鏡卷五や榮華物語初花卷(初花卷は寬弘二年と云ふ)の云ふ帥宮が式部を同車させられ、祭のかへさの見物をされて評判になつたのは、この春の事と思はれる。

然し式部は又この宮をも失はねばならなかつた。宮は寬弘四年四月十二日、太宰帥三品で薨ぜられた(權記、御堂關白記)。式部には心の痛手深く、情熱的な彼女は尼にさへならうとした程で流石の彼女も一年の喪に服したらしく思はれる。

かうしてやがて式部は召されて中宮彰子に奉仕し、後、藤原保昌の妻ともなるのであるが、これも結局失敗に終つた。猶式部に通つた人々には、幾多の殿上人や道命の如き僧さへも數へ得るのである。

小式部は內大臣教道(道長三男)や左兵衛督公成の子を生むのであるが、これも母に先き立つてしまつた。式部の晩年の精神的の打擊は可成大きいものがあつた。

式部に就いてはまだ云ふべき多くの事があるが、今はこゝで一先づ打切らねばならない。

最後に式部の性格及び愛欲の生活を一瞥すべきであるが、それには彼女が殘した千五百首に垂んとする歌を眺めた後でなければならないので、限られた頁に於て能くする所ではないが、只古來式部程毀譽褒貶の渦中にあるものなく、一は情の激するまゝに愛欲、情痴の世界に狂奔したとするもの、一はこれを駁するもの、囂々今猶盡きる事なく繰返されてゐるのであるが、何故彼女の殘した歌の殆ど全部が哀調を帶びた悲歌であるかと云ふ事や、何故むくつけきと云はれた武士に再嫁して丹波まで下るに到つたかと云ふ事や、彈正宮、帥宮と申せば、如何にも容姿と云ひ、御身分と云ひ、才藻と云ひ當時に雙びなき御方であつて、式部にとつては、おほけなくも理想の御方であつた事は論を待たないが、式部自身は、家門、權貴が權威を逞しうした王朝に於て悲しくも

「何のやんごとなき人にもあらず……たれも人々あまた通ふ所なり」

と下賤と不評に包れてゐた事を考へて、もう一度見直ほさるべきではなからうかと云ふ事を述べるに止る。この下賤と不評とを以てして、矛盾を孕む王朝時代の結婚制度を脫却せんとした所に彼女の所謂――後世の云ふ――情の激するまゝに狂奔したと呼ばれる生活があつたのではあるまいか。

とまれ既に見た如く、この日記を通じてのみ見るものは、王朝人の庶幾した所謂王朝時代の氣分と趣味に統一された戀と藝術との渾融の世界であつて、この氣分に陶醉する世界が更級日記の著者の抱いた夢幻への世界であり、この情趣の動く所に、物のあはれが見出されると思ふ。

和泉式部日記一卷は、處々に寫本を殘すが先づ大體二系統になり、一は京大國文學研究室藏の所謂應永本——奥書は

于時應永廿一年孟春日書之

權大納言從二位爲尹判

——系統のもので、二三の現存の寫本及び流布本はまづこの系統に屬し、他はこれとは全く異本的立場に立つ三條西家本である。

註釋書としては古いものなく、帝國圖書館にある「和泉式部物語標目」は見るべきものなく、近くは與謝野晶子氏や竹野長次氏のものがあり、全譯王朝文學叢書にも收められてゐる。

紫式部日記

この日記二卷は源氏物語の著者、紫式部の著である。又「紫日記」（明月記。湖月抄に引く明星抄。）、「紫式部」（類聚名物考）、「式部が日記」（水鏡河海抄）の名がある。

式部が夫宣孝の死後、宮廷に仕へてからものしたもので、一條天皇の寛弘五年七月、上東門院彰子が御懷妊の爲、退出してゐられる頃の秋のけはひ立つ土御門殿の情趣に筆を起し、皇子敦成親王、後の後一條天皇の御降誕とそれを

めぐる種々の儀式の事、外祖父道長の喜び、十月には土御門邸へ行幸があつて、浄土もかくやと思はれる御遊のあつた事、中宮彰子御參內と共に式部のまた宮中入りをする事、十一月の五節の舞姫や賀茂臨時祭の事、大晦日の夜宮中に追剝のあつた事、翌六年正月の御戴餅の事、道長に挑まれた事等あつて、翌七年正月十五日、三宮五十日の御儀の事に終つてゐる。

然るに、寛弘六年正月の御戴餅の記事の後に、日記體とは異つた文勢を持つた隨筆體の部分がある、これは同輩の女房の批評を中心として、當時宮廷搢紳間に評判高き和泉式部、赤染衞門、清少納言に對し、殊に和泉式部と清少納言には、忌憚なき辛辣な鋭鋒を向けてゐる。次に自己の事及び主上が源氏物語を御覽になつて、これは日本紀を讀んだ者の作であらう、文才があると仰せられたので、日本紀局と綽名の附いた事や、人目を遠慮して中宮彰子に樂府を教へ奉つた事や、父爲時が兄惟規に史記を教へてゐるのを側で諳んじて、父が式部の男でないのを歎じた事等自負めいた事が書かれてある。この隨筆體の部分は、日記文に攙入されたものであつて、且つ式部が親しい間柄の或る人に送つた消息文であると云ふ說は疑はれまいが、その相手が娘大貳三位であるか、友人であるか——式部には隨分親しい友人のあつた事は、日記や家集の示す所であるが——の兩說に就いては、猶考ふべき餘地があると思ふ。

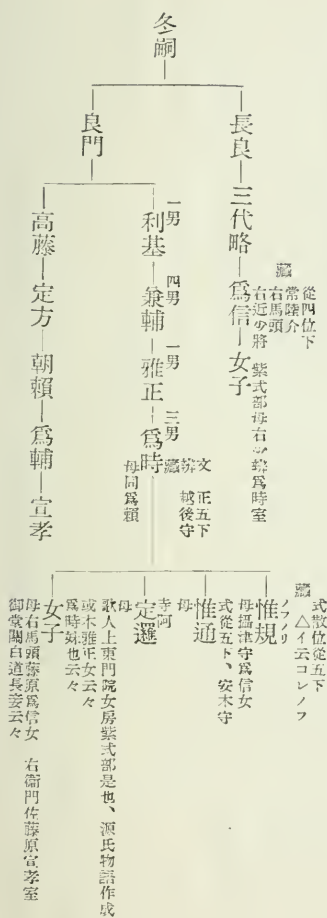
又この日記は二卷二冊であるが、完本でなく抄錄說(中根香亭)、脫漏說(木村架空)、原形が既に零本であつたらうとする說(足立稻直、關根正直)等があるが、今の所何れも臆說に止る。

この日記は著者が、源氏物語の作者でもあり、かた〴〵古くより愛讀されたらしく、傳信實筆の「紫式部日記繪卷」の詞書の筆者が、後京極良經であるとすれば、鎌倉初期のものであるし、又既にこの書の記事が榮華物語初花卷、寛

弘五年の條の粉本になつたであらうことも周知の事實である。

この日記を通じて見るものは、勿論式部の性格とか、思想とか云ふものでなければならないが、亦、當時宮廷に於ける言語、儀式、風俗、信仰等の研究には缺くべからざる資料である。資料的、風俗的な觀點よりの考察は、他日の機を待つが、こゝでは聊か式部の閲歴に觸れて、この日記を、そして出來得べくんば、不朽の傑作源氏物語を生むに到つた式部の内面的な精神に少しでも觸れて見たいと思ふ。

式部の家は、藤原良門(冬嗣六男)の裔である。矢張この家にも學問の達者多く、曾祖父兼輔は延喜の歌人で貫之等と親交深く、世に堤中納言と稱せられ、家集一卷を殘し、祖父雅正、その弟清正、叔父爲賴等もその歌が勅撰集に載せられてゐる。

尊卑分脈によつて式部の系圖を見ると、(抄要)

式部の父爲時は、碩學菅原文時に學んだ儒者で、本朝麗藻集に詩作を殘してゐるが、又歌人でもあつて、後拾遺、新古今集共に歌が載せられてゐる。爲時は一條天皇より、夙く學才を認められ、嘗て越前守を望んで、源國盛に先んじられ、悲歎の餘り奉つた詩句の

苦學冬夜紅涙霑レ巾　除目春朝蒼天在レ眼

なる文句に天皇の御感を蒙り、越前守に任ぜられた說話も傳はつて、今昔物語集、今鏡、十訓抄、本朝通鑑（長德二年春正月）にも採られてゐる。爲時は攝津守爲信の女と結婚し（尊卑分脈）、惟規、紫式部を擧げた。その外に惟通、定暹が知られてゐるが生母は明かでなく、又家集によれば式部に姉もあつた樣であるが、これも詳かでない。

兄惟規も歌人で、後拾遺以下勅撰集に多くの歌を殘し、官は少內記に任ぜられ（關白記長保六年三月四日）、又兵部丞（同寛弘五年七月十七日）になつてゐるが、父の任國越後に遊んで病を得、その地に歿した。臨終の床に、僧の勸むる念佛を拒み、中有に迷ふとも、紅葉の風に散る野、尾花のそよぎに鳴く虫の音にと、情趣に執着した話は、彼の性格を窺ふに充分であつて、式部も多分にこの氣分を具有してゐたと思はれる。式部も父の任地越前に下つた事もあつたが、後、藤原宣孝の戀を受入れてこれと結婚した。それは長保元年頃で、當時式部は二十歲を少し越えた位であり、宣孝より約二十歲前後或は其れ以上年下であつたかと思はれる。宣孝は矢張式部と同族で——前揭系圖參照——且つ父爲時の母は宣孝の曾祖父定方の女であり、道長の知遇を得てゐたらしく、御堂關白記に其の名が現れて來る。式部は宣孝の戀を喜んで受入れたのではなく、家集によると寧ろ拒絕してゐるが、宣孝の執拗に訴へる熱情にほだされたのであらう。宣孝には當時既に二三人程の妻妾があつた。

女は男に見ゆるにつれてこそ、悔しげなる事も、めざましき思ひも、おのづから打交るものなめれ　――源氏物語若紫上――

と喝破した式部が、この宣孝に容易に許す筈はないが

いとさかしく身固めて、不動陀羅尼讀み印つくりて居たらんも憎し　――源氏物語、常夏――

と觀じてゐる彼女は、恐らく父などの勸めもあつて、宣孝に從つたのであらうが、一旦嫁した式部は、妻として如何に貞節であつたかは今更說くまでもあるまい。宣孝との間に一女賢子（後の大貳三位）を擧げたが、宣孝は長保三年四月卒した。これより式部は夫を偲びつゝ、つゝしまやかな母として、賢子の養育に日を過した。源氏物語はまづこの寡婦生活中に筆を染めたと云はれてゐる。その作者として既に名を成してゐた式部は、當時才媛の集つてゐた中宮彰子に召されたのであるが、この宮仕へにも式部の心は進まなかつたものである事は、日記の屢〻語る所であるが、父爲時や亡夫宣孝が恩顧を蒙つた道長の懇情もあつたが、寬弘四年末頃宮中に入り中宮彰子に仕へたのである。

數ならぬ心に身をばまかせねど身に從ふは心なりけり

の歌はこの時の心境であらう。さればこそ宮中に入つても、寂寥と哀愁とは彼女の心を驅つて常に、大作源氏物語の完成に精進せしめたのであらうと思ふ。翌年七月から筆を起したのがこの日記である。

この日記の作者の性格は、著しく反省的であり、態度は消極的であると思ふ。常に自己を顧みて、つゝしみを失ふことを極度に恐れ、紫上を以て女性の、空蟬の如きを以て寡婦の理想とする如き態度を以て生きて行つたと思はれる日記の到る所に見える寂寥の感じも、源氏物語に見える批評的態度もこゝにその由來を見るのである。

中宮の御前に侍つては「うき世のなぐさめにはかゝる御前をこそたづね参るべかりけれ」と讃仰する直後から「うつし心を引たがへたとしへなくよろづ忘るゝにもかつは怪しき」と云ひ、初めて宮仕へした師走廿九日が來ると、宮廷生活に「こよなく立ちなれにけるもうとましの身のほどやと覺」えて

年くれて我世更け行く風の音に心の中のすさまじきかな

と悲歌する。この心は又御妊娠に惱ませらるゝ上東門院が、その御惱みを「さりげなくもてかくさせ給」ふ御態度を讃美する心でもあり、同時に五節の童女が、「曇りなき晝中に扇もはかばかしく持たせず、そこらの公達と立ちまじりたるに、さてもありぬべき身の程心もちひと云ひながら、人に劣らじとあらそふ心地もいかに臆すらんと、あいなくかたはらいたきぞかたくなしきや」と難ずる心である。作者の庶幾する世界は、現實そのものではないが、勿論この現實の世ならぬものでなく、理想としてあるべきものを現實の上に見出し得る世界であつて、卽ち殿の三位の君(後の頼通)が、つゝしみを忘れぬ態度にて、「おほかるのべにとうち誦じて立ち給」ふさまを、「物語にほめたる男」と見、辨の宰相が、「萩、紫苑いろ〳〵の衣に濃きこうちぎ上に着て顔は引入れて硯の筥に枕して」寐たる容態は、「繪に書きたる姫君の心地」して、我しらずその口覆ひを引やりて、「物語の女の心地もし給へるかな」と物狂ほしきまでの態度を敢へてしてゐる。この情趣と美的幻想に興奮する刹那の世界こそ彼女の庶幾した世界でなければならない。この幻想の世界の破れる事を常に恐れる心が、消極的と云はれ、反省的と評される式部の態度を決定してゐるのではあるまいかと信じる。從つて渡殿に寐たる夜、道長に挑まれた時、戸をあけなかつたと云ふ日記中の記事を以て、直ちに式部の貞節を云々する古來の說は、必しも肯綮に中れるものでなく、式部自身、「恐しさに音もせで明したる」と云ひ、「あ

けてはいかにくやしからまし」と歌つてゐる如くである以外の何物でもなく、かくてこそ幻想に生きた式部の眞面目があると思ふ。前掲「年くれて」の歌などの心境もこれを裏書するものであらう。

この精神は又更級日記の著者の精神へ繋がりを想はせるのであるが、式部の理想とした美的世界は、更級の著者の如く、物語や話によつて夢見たこの世ならぬものでなく、現實の世を知り盡した後に庶幾した現實にあるべき世界である。これこそ現實に直面して「光源氏ばかりの人はこの世におはしけりやは。薫大將の宇治に隱しすゑ給ふべきもなき世なり。あな物狂ほし」と叫んだ更級の著者の少女の如きものでなく、その中に人生の實相を見出して、そこに無限の懷しみと溫みとを感じたのである。卽ち、式部が見、式部が描いた道長は官位と權力を極めたその人でなくて、赤裸々な人間道長であつた。

「宮の御てゝにて麿わろからず、麿がむすめにて宮わろくおはしまさず、母も亦幸のありと思ひて笑ひ給ふめり……」

を道長の傲慢なる自負と說くは人間性を解せぬものと云ふべく、上東門院の生み奉つた若宮を抱き奉つて、御尿に濡れ、

「あはれ、この宮の御しとに濡るゝは嬉しきわざかな、この濡れたるあぶるこそ思ふやうなる心地すれ」

と自ら紐解きて、几帳の後にあぶりつゝ笑みまける道長にこそ、吾々は榮華や大鏡の描く絢爛たる繪卷物の主人公道長には感じられない親しみと敬意を感じるのである。かうした觀照の態度はまた日記卷頭の秋のけはひを感受するそれでなければならない。日記文に攙入されたと稱される隨筆體の人物評論は、この態度が同輩に向けられたものに外

ならない。枕草紙の描寫は主觀であるが、この日記はそれを通した客觀である所が、淸、紫の性格の相違を表してゐるものであらう。

　が、「和泉はけしからぬ方こそあれ、…　恥かしき歌よみやとは覺え侍らず」と難じ、淸少納言を、「したり顏にいみじう侍りける人…」と忌憚なき批評を下してゐる態度には、女らしい嫉妬を感ぜずにはゐられず、また同僚との交際に於て朗らかに振舞ひ得ずして、尙、內心には「人の中にまじりては、いはまほしきことも侍れどいでやとおもほえ、心うまじき人にはいひてやく無かるべし。物もどきうちし、我はと思へる人の前にては、うるさければものいふ事ももの憂く侍る…」と可成り自ら高く持する意識を藏してゐた事は知らるべく、少女時代兄より早く史記を暗誦したと自ら筆にする事なども同樣に見得ると思ふ。

　とまれ式部の歩んだ道は、現實と理想との相剋の苦惱に徹する事によつて、自分の運命に淋しく堪へて行つた寡婦の生活であつた。吾々は、彼女の大作源氏物語に描かれた種々の女性の性格を分析する事によつて、式部の精神生活を知る助けとなし得るのであり、猶それによつて、式部の女性、文學、倫理觀等を見得るのであるが、今は只式部の精神生活の考察には當然源氏物語も同時に考へられて來なければならない事を附言するだけに止めよう。

　この日記は、諸傳本皆、伏見宮邦高親王御自筆本によつたものの系統に屬してゐる。

更級日記

　この日記は菅原孝標の女の著である。この日記は何時の世からか錯簡が起つて、解釋し得なかつた個所もあつたが、

佐佐木信綱博士、玉井幸助氏によつて、定家自筆の御物本が發見されて、この本に綴誤りがあつたのをそのまゝ書寫され、轉寫され、流布された事が明かになり、原形に還り得たものである。日記名は、奥の

月も出でゝ闇にくれたる姨捨に何とて今宵尋ね來つらむ

の歌に據つたものであらう。

作者の父孝標は一代の碩學道眞の五世の孫で、代々文筆の家である。官途は澁滯して、晩年に近い四十五歳の寛仁元年正月二十四日、上總介に任ぜられ、六十歳にして常陸介になつた。この日記によれば、任滿ちて歸京した後は、全く世の交りをせず、不遇な生涯を終へたらしい。孝標には二人の妻があつて、一人は藤原倫寧の女、即ち作者の母であつて、其の姉に、蜻蛉日記の著者道綱の母があり、兄弟に歌人長能のあつた事は既に觸れた如くである。他の一人は、上總大輔と呼ばれ、後拾遺に歌一首を殘す歌人で、高階成行の女である。作者が父孝標と共に、その任國に下る時は生母の手を離れてこの繼母と下つてゐる。高階家も代々學問を以て聞えてゐる事は、言ふまでもなからう。作者の兄定義は、大學頭、文章博士となつて令名高く、この日記には「せうとなる人」と記されてゐる。又一人の姉があり、作者に劣らず幻想的であつた事は

「月のいみじう隈なくあかきに、皆人も寐たる夜中ばかりに緣に出てゐて、姉なる人空をつくづくと眺めて『たゞ今行方なく飛び失せなばいかゞ思ふべき』」

と突然問ひかけたり、風來の猫を飼ひ馴してゐる頃、病めるまゝに見た夢から、この猫を故侍從大納言行成の女の生れかはりとして、大切にしたりしてゐる事等によつて知られる。如上の事情は、作者の文學的素質を考へる上に於て、

見遁せない事である。猶系圖によると、兄弟に安樂寺別當の僧基圓と、生母及び名未詳の弟か妹か一人あつた事が判る。

記事は、作者が、父の任國上總にあつて、姉や繼母の語る源氏やその他の物語をきいて、物語の世界に憧憬し、等身の藥師佛に「京にとくあげ給ひて物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ」と身を捨てゝ祈つてゐた念願が叶ひ、作者十三歳の、後一條天皇の寛仁四年秋九月、父上總介の任果てゝ、一族歸京する事に始まり、京に着くまでの九十日程の長の旅路の思ひ出を書き、着京後は、只管物語を讀耽り、その物語の雰圍氣の中に夢見て生きた作者が、やがて空想裡の自分に似るべくもない現實の自分を追々自覺して行くさまや、三十二歳にして宮仕へしたが、僅かの期間で退き、その後、橘俊通に嫁して子供を生み、爾後母として子を思ふ心情や、はかなき人間として未來を祈る爲に、石山、初瀬、鞍馬、太秦等に籠る信仰生活を記し、作者五十歳の天喜五年七月卅日に、夫が信濃守となつて、同八月廿七日任國に下り、長男仲俊も伴はれて行つたが、翌康平元年突然任國から歸つた夫が、十月五日病歿するまでの前後四十年間に亙る事を、夫の死後筆を執つて記したものである。從つて作者の記憶の誤りから、上總國より歸京する途の地名に前後する所のあるのは止むを得ない。此の日記の作者の傳記はこの日記による外なく、この日記は作者の自敍傳である。この日記を通じて見る作者は、夢幻的である。姉もさうであつた事は、既に述べた所で、これはその家の血を承けてゐる事にもよらうが、同時にその周圍を考へねばならない。十歳にして道の果てなる上總に下つた作者は、姉や繼母の語る物語の美しい世界にどんなにか心をときめかし、未來にこの世界が自分を待つてゐてくれると考へずにはゐられなかつた。人目忍んで等身の藥師佛に額づいて物語の自由によまれる都へ上させ給へと祈つた作者

には、京へ着くまでの九十日程の苦しい旅路も、既に美しい物語の世界であつた。竹芝寺の傳說、ふじ川の傳說、闇に消え行く足柄山の遊女、のがみの遊女、途に病みて、月影漏る一重葺の屋根の下に臥す乳母も、この世ならぬ美しい世界のものとしか見えない。京に着いた作者は、をばから贈られた源氏物語を耽讀し、「一の卷よりして、人もまじらず、几帳の中にうち臥して引出でつゝ見る心地、后の位も何かはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたる限り」讀みて、物語中の人物になり切つて、現實を美化してゐるのである。自分の姿を思つては、今こそ惡いが妙齢になつたなら、「容貌も限りなくよく、髮もいみじく長くなりなむ、光る源氏の夕顏、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめ、」と思ひ、「物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を年に一度にても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに、山里に隱しすゑられて……」と願ふのであつた。勿論物語に對して、批評的な態度であるのではなく、自己を物語の世界の人物に置きかへる無邪氣な少女の態度である。從つて、乳母の死、繼母との離別も、行成の女や姉の死も、感傷的な心持で取扱はれてゐる。

萬壽二年か、父が司召に豫期してゐた國司に任ぜられず失望する事があり、四月東山に移つて周圍の淋しき風景に心が向けられてゐる事が注意される。この頃より、作者は物語の世界の夢を破る、不愉快な現實のけはひを仄かに身邊近く感ずる。そこに動搖する作者の氣分が見られる。治安元年、源氏物語を讀耽つてゐる頃「法華經五卷とくならへ」と告ぐる僧を夢に見たが、經習はむとも思ひ懸けなかつた作者が、この頃は、尼としんみり物語をする迄になつて來てゐるが、それでも强ひて浮舟の女君の樣な境遇にならうとひたむきに努力してゐる。こゝに蜻蛉日記の作者や和泉式部、紫式部の庶幾した世界と全く違つたものを見るのである。長元五年、作者廿五歲の年、父が纔に得た司は、

東路遠き常陸國であつた。老齢六十にして常陸に下る父が作者に遺した言葉「我も人(作者)も宿世つたなく……」は悲哀であり、七月十三日、任地に發つ父が、作者と顔を見合せて、涙をほろ〱と流して出る後姿を見送る心地、「目もくれまどひてやがて臥れぬる」と作者は述懐してゐる。幼き日往來した東路を思ひやつて、明くるより暮るゝまで、東を遠く眺めては、思ひを父の任國に馳せて、過すのであつた。これより漸く物詣でする様になつたが、それは、物語を見せ給へと祈り、浮舟の女君の様に光源氏などのやうにおはせん人を、年に一度にも通はせ給へと願ふのでなく、只安態に歸る父と逢はせ給へと祈る現實の世の人となつてゐる。清水に詣でゝは、「行く先のあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」とむづかる僧を夢に見て、人知れず心に深く刻み、初瀬に奉つた鏡には、ふしまろぶ自己の姿が映る夢がある。長元九年、任國より上つた父は、老衰し切つて、殘りなげに世を思ふばかりでなく、作者の實母とした二度目の生活も、そこに暗い陰が流れてゐて、やがて母は尼となつて住む所を隔てるに到り、老父は只作者を唯一の蔭と頼む様になつたのである。父母共に、頑なの、且つ地味な古代人であつたらしい。作者には猶作者を母とも慕ふ姉の遺兒二人かある。こゝに浪漫的の世界より、現實に引降ろされた作者の苦惱が見られる。物語の世界をこの世に築くべき宮仕へも彼女には氣が進まず、父や姉の遺兒やを思ひつゝ泣き暮して、數ケ月で退出し、その後は全く里居がちの奉公であつた。作者の仕へたのは祐子内親王である。この頃作者は、夢によつて、自分は前世には清水寺の佛師であつたが、功德の爲に孝標の子に生れた事を知る。

作者の家庭生活が不幸なものであつた事は今こゝに繰返す必要はない。この現實と、作者には現實でしかあり得ない暗示的な夢とにさいなまれ、「思ひし事どもはこの世にあんべかりける事どもなりや」とまで、自分の抱いてゐたも

のは畢竟空想に過ぎなかつた事を知り、「あなもの狂ほし」と後悔してゐる。然し、幻的なものを慕ふ乙女の如き純情は、この現實の苦惱の中にありつゝも、猶內侍所に參り、豫て念ずる天照大神を拜まんとした際、燈籠の火影のまたゝきの蔭に見た「博士の命婦」の姿は、ほのかな夢の世の存在でしかあり得なかつた。この頃、作者の身も心も一轉期を劃してゐる。卽ち作者は橘俊通と結婚し、出產をした。それは長久三年頃より寬德二年頃まで、卽ち作者の三十五より三十八歲頃までの事である。この前後、作者には仄かな初戀にも似た夢の如きローマンスが唯一つある。それはある年の十月初めの不斷經のある暗き夜、右大辨資通と四季の品定めに就いて、しめやかに語り合つた時の事である。然し作者は、「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ、」思ひ知りはて、一向に信仰と母性愛に生きようとするのである。寬德二年（年三十八）石山に詣でゝも、祈るは只、男仲俊の爲であり、翌永承元年には、大嘗會御禊の日に初瀨に思立つ如き、全く物詣に沒頭してゐる。五十歲の天喜五年、夫は信濃守となり、八月二十七日、子仲俊を具して、任國へ下るのであるが、供の者が歸つて來て、人魂が飛んで京の方へ來たなどゝ不吉な前兆を知らすのであつた。作者は恐らく供のものであらうと考へ、只我子の安穩を祈つてゐると、翌康平元年突然夫が任國より歸り、間もなく病歿してしまふ。こゝで作者は過去に見た啓示的の夢が皆心に甦つて來、自らの運命の豫言に外ならなかつた事を知り、「昔より由なき物語歌のことをのみ心にしめで……おこなひをせましかばいとかゝる夢の世をば見ずもやあらまし」と後悔するのであつた。かくして作者は、多くの夢（十一の中九つは自分が見たもの）の中、天喜三年十月十三日の夜、はつきりと見た彌陀の姿と言葉とを後世の賴みとして生きてゐる事に筆を擱いてゐる。これから後の寡婦生活は日記には記されてゐないが、略〻如何なるものであつたかは察せられると思ふ。以上は更級日記の梗概

であると共に、作者の精神生活の展望でもある。

物語に憧憬し、物語の中の世界を自分の未來に描き、乙女心をときめかしてゐた作者が、めまぐるしくも繰返す人の世の悲哀を體驗して、醉ひもせぬ夢果敢く醒めて信仰の世界に入るのであるが、更に晩年近くに受けた不幸な結婚生活の後は、阿彌陀佛の來迎の夢を唯一の頼みとして生きて行つたと思はれる。この夢は、乙女時代のそれとは異つて、可成はつきりと作者に體驗せられたもので、その描寫も驚くまで鮮明である。こゝに作者の精神が浪漫的なものより神祕的なものに進んでゐた事情が見出される。これは果して、この作者のみが經驗した特殊なものであらうか。否、この作者を生んだ時代の凡ての人々に一般のものでなければならない。この日記は夫俊通の死後の康平二三年間の寂寥の中に書いたものとすれば、この頃は、望月のかけたる事なしと歌つた御堂殿歿して三十年に近く、その子頼通世を保つて四十年、藤原氏は今や一路崩壞を辿り、東奥州亂れ、この地京また火ありて藤氏の榮華を語る堂塔伽藍次々に滅んで行く。王朝中期に完成した調和美、情趣美の文化またこれと運命を共にする。この時代人の精神生活の展開の跡づけは、この時代に生きた更級日記の著者の精神生活の跡づけであらねばならないと思ふ。

成尋阿闍梨母集

この集二卷は、宮内省圖書寮の藏で、近年、佐佐木信綱博士によつて、初めて紹介せられたもので、最近雜誌文學(一卷二號―三號)にも本文が掲げられてゐる。成尋の母が年老いて、我子成尋の入宋の機に遭つた前後及びその後に於ける傷心を記したものであつて、母の子を思ふ情で終始してゐる。

成尋阿闍梨は元亨釋書にもその傳が見えてゐるが、姓は藤原氏で寛弘、長和の交に生れ、石藏の文慶に師事した。日記の記す如く、世に重んじられ、宇治殿賴通の知遇を得てゐた事や、うちの修法にも參つてゐた事が知られる。夙に、「唐に五台山といふ所に文殊のおはしましけるあとのゆかしくをがまゝほしく」思つてゐたが、陽陰師の言葉に從つて、六十一歳以後に入宋の決行を思ひ立ち、後三條天皇の延久二年正月十一日請特蒙天裁給官符於本府隨大宋國商客歸鄕巡禮五台山並諸聖跡等狀を公に上り、同三年十月十三日入宋宣下附を請ひ、同四年三月宋船の便りあるに乘つて渡宋し、素志の如く聖跡を巡禮し、神宗の勅によつて太平興國寺に入り、傳法院に住み、神宗の六年大旱に雨を祈つて、善慧大師の號を賜る。參天台五台山記を殘し、かの地に命を終へた。勅撰集では詞花、新古今にその詠を殘してゐる。

成尋の母は歌人で、勅撰集にも七首見えてゐる。その著たるこの集の特色は、道綱の母がその蜻蛉日記に於て、和泉式部もその晩年に於て、更級日記の作者はそれによつて生きた母性愛で貫かれてゐる事である。勿論この場合、八十にもなつた老尼の筆であるからではあるが、素材に於て既に述べた他の諸日記と異つてゐる點が注意されなければならない。

記事は後冷泉天皇の治暦三年から起る。著者には、仁和寺の律師と石藏の阿闍梨、即ち成尋の二人があつて孝養の道を盡した事、阿闍梨世に重んぜられ、修法の爲に宇治殿にも參り內裏にも參り、足を宙にして步いた事を記してゐる。

「宸儀渡ニ御莵道橋ニ之間。伶人棹ニ華船ニ泝ニ河上ニ。凡仁祠之莊嚴。事絕ニ于襃篇ニ。」(扶桑略記)

とその盛儀を記された治暦三年十月の後冷泉天皇の平等院行幸や、翌四年四月の天皇の崩御にも筆が及んでゐる。

上卷は、阿闍梨が入宋を志すに到つた顚末と作者自身の感想を記し、下卷は、阿闍梨と別れた後の日々の傷心を盛つたものである。

子を思ふ情高潮しては、別れて行く子を恨みさへするのである。別れの際涙に顏も見えず胸ふたがりて物も云はれなかつた作者は、

この人まことにせんと思ひ給はんことたがへじなど思ひしことの、あまりにもしたがひて、かゝることもいみじげになきさまたげなりにし、

と云ひ、日を經るまゝに後悔し、「そでをひかへてゐてぞあるべかりける」と泣いてゐる。この後悔は日記中に幾度も繰返されてゐる。老いた我身も忘れ、離れてゐる子に復相逢ん心から、月日の速さも羊の歩みの如く思ふのである。

なげきつゝはかなうすぐる日數かなこれやひつじのあゆみなるらん

又愛する我子が眞の道を求めてゆくのであるものを、我悲しみ故に恨めしく思ふは子の爲に善いことではなく、せめて我身の死なん事を思ひ、それさへ叶はぬ事を喞つてゐる。

かの人の御ためあしときゝはべるは、たゞ身のくるしきにとくしなましかばと、思ふよりほかのことおもはじ、それにつけても身のいのちのながさを思ふ。

果ては、とく死なせ給へと佛に念じるのであつた。

上卷の末に、母の愛の父の愛に異なる事を說き、妊娠中に於ける母の苦惱と、所謂胎教と出產時の苦痛をのべては

はらのうちにてみのくるしう、おきふしもやすうせねど、我身よくあらんとおぼえず、これをみるめよりはじめて、
人よりよくてあれかしと思ひねんじて、うまるゝをりのくるしさもゝのやはおぼゆる

又、生れては人一倍弱かつた成尋を養育する苦しさを述べてゐる文章の如き、未だその類を見たい。釋迦の四面の門の說話や、若年の頃經驗した寂昭の渡唐の事なども引いてゐる。せめて氣も紛るゝかと嵯峨野に遊んでも、却つて草や蟲に悲しみを增すのである。そして

おもへども〳〵よにたぐひなき心つきたるひとかなとのみ、うらめしくおぼえはべるも、あまりのいのちながき身はづかしうぞ……

よろづにつけてこひしく、などて、たゞいみじきこゝろをいだしてなきまどひても、ひかへとゞめきこえずなりにけん……

と繰返し愚痴して、涙の日を過してゐた作者も、阿闍梨が別れの際に殘した、「もしいきたらば、かへりまでこむ、うせなばかならずごくらくをあひ見をが見たてまつるべき」の言葉によつて安心を得る樣になり、淨土に一蓮托生を願ひつゝ、靜かな心で世を終へたらしい。成尋も遂に再び母に相見える事なく、彼地に歿したのである。

この集は、母性愛に終始してゐるが故に、冗漫の評も受けられようが、言々、人の子を泣かしむるものあり、母性愛の文學作品として獨步のものであると思ふ。收むる所の短歌七十餘首、長歌一首、また王朝女流文學中の名玉たるを失はない。

作者の年齢に就いては、日記の初の所に「年八十になりてよにたぐひなきことのはべれば云々」とあり、更に下卷

に、「むかし十五許なりしほど、みかはの入道といふ人わたるとて云々」と、寂昭の渡唐の長保四年の事を、十五許と云つてゐる事によつて、略ゝ知り得ると思ふ。

讃岐典侍日記

この日記は、堀河天皇に奉仕した讃岐典侍の著である（今鏡巻二、たまづさ新勅撰十八雑五）。和歌色葉集（静嘉堂本）に「堀川院の日記」ともある如く、堀河天皇に奉仕した典侍が、嘉承二年六月廿日頃の堀河天皇御不例の事より、七月十九日の崩御に到るまで、親しく御看護申上げた事を細かに記し（以上上巻）、後、更に新帝鳥羽天皇に召されて、御即位、大嘗會等に奉仕した事や、先帝追慕の事を記してゐる日記である。この日記には改竄説があるが、明證ある論ではない。作者に就いては、古く源三位頼政の女とする説が行はれてゐたが、これは年代の上で相容れないし、又、顯綱の女、伊豫三位兼子とする説もあつたが、最近玉井幸助氏によつて、作者は顯綱の女ではあるが、伊豫三位の妹長子である事が明かにされた（史學雑誌四十編第九號）。作者の姉、伊豫三位兼子は叔父敦家に嫁し、承暦三年三十歳（中右記の殁年より逆算）の時、男敦兼を生んだが、丁度この時降誕された堀河天皇の御乳母の一人に選ばれ、後、應德三年十二月十九日、堀河天皇即位の日、從五位上で褰帳に奉仕し（天祚禮祀職掌錄、及び本日記）、寛治元年四月十六日には賀茂祭の使となり（長秋記）、この頃既に、父の官名によつて、讃岐典侍と呼ばれてゐたらしく（同六月十日）、同二年十二月十七日には八十島使の役を奉仕してゐるが（中右記）、この爲か三位に敍せられ、夫の官名によつて伊豫三位と呼ばれもし、又、讃岐三位と呼ばれもしてゐたかと察せられる。

作者長子は、堀河天皇の崩御まで、約八年奉仕してゐた事は、その日記の初に、「……八年の春秋つかうまつりし程

一と云つてゐるので知られるが、作者長子が、姉兼子と共に、堀河天皇に仕へ、典侍となつて姉の舊名なる讃岐を以て呼ばれてゐたとしても、何等矛盾はない。典侍となつた翌年元旦、御陪膳の職を勤め（中右記）、帝の格別の御寵があり、御病篤き天皇は、常に典侍をお側よりお放しにならなかつた事は、この日記の示す所である。嘉承二年七月、天皇御重態にならせられた際、作者の上役であつた姉伊豫三位も、生憎病中にて、親しく御看護申上げられぬ爲、作者は姉の命を奉じて日夜御病床に侍し、天皇の崩御に際しては素服を賜つてゐる。內裏退出後、先帝御追慕に日を送つてゐた作者が、强ひて召されて、新帝鳥羽天皇の典侍となり、その年十二月一日の新帝即位式に當つては、また褰帳に奉仕した。堀河、鳥羽の二代に、姉妹相次いでこの榮に浴した譯である（天祚禮祀職掌錄、本日記）。この時、作者は、一度役を奉じた姉に、色々教を受けてゐる。以後十一年に近い間典侍として奉仕し、前朝同樣讃岐典侍と稱した。職を辭して後も、鳥羽天皇の御信任は厚く、時々參內して天機を奉伺してゐるが、長秋記によれば（元永二年八月廿三日）、邪氣が取憑いたので、暫く參內を禁じられたらしい。この精神異狀の事は明かにし得ないし、その後の彼女の動靜も知る由がない。

この日記は、人生に於て最も嚴肅なる死と云ふ問題を取扱つてゐる點が既に異色である。十善の帝王が、死と云ふもの丶前には、只一個の人間として存在されてゐる記事は、淺薄なる感傷の涙と筆とを遙かに超えてゐる。作者が事實をこま〴〵に記してゐる事を冗漫にして活氣なしと評する前に、先づ作者の透徹した凝視と哀傷とを見なければならない。堀河天皇の崩御に際して、

「……人たち思ひまゐらせらるらむにもをとらず、思ひまゐらすと年頃は思ひつれど、なほをとりけるにや、あれ等のやうに聲たてられぬはとぞ思ひ知らるゝ」

と物狂ほしきまで泣き叫ぶ乳母達の前で、自分を反省する心は、さうしたものを超えて、遥かに心深く涙する個性であらう。

記事は、前述の如く、嘉承二年六月廿日、天皇御惱の事に始まつてゐる。人々はめもみたてぬ、と仰せられて、世を恨めしげに思召されてゐたが、七月六日頃より御心地大事に重らせられた。帝を御介抱申上げるのは、作者を加へて、三人の女房のみであつた。日暮れるまゝに堪へ難げに思召したので、かくと白河法皇に申上げ、驗高き名僧が參上して、御加持が始められる。これより七月十九日崩御迄、御苦惱が續くのであるが、日を經るに從つて弱らせ給へる天皇を、作者は眞心こめて御介抱申上げてゐる。不可抗力の運命の前に、如何ともなし得ない遣瀨なさで、作者の心はしめつけられてゐる。

今は耳もはか〴〵しく聞えずと仰せられて、いとゞよわげに見えさせ給ふ、しばしばかりあつて、此度はさるべきたびと覺ゆるぞと仰せらるれば、つゝましけれど、などさはおぼしめすぞと申せば、僧正のさしもかしらより黑烟を立て祈れど、其しるしも覺えで、心ちのやすまず、まさる心地のすればと仰せらるゝ……

の描寫や、御受戒の時の

法印參らせ給ひぬれば、み几帳ばかり隔てゝ、御なほしとりてまゐれと仰らるれば、取て參りたり、御手水參らすべけれど、おきあがらせ給ふべきやうなければ、紙ぬらして御手などのごはせ參らせなどする程ぞかなしき、御かうぶりなど持て參りたれば、するかせぬかの程にをし入て、御なほし引かけて參らせたる、御紐さゝむとおぼしめしたるなめり、さゝんとせさせ給へど、御手もはれたれば、えさゝせ給はぬ」

の描寫は御痛はしい極みである。

病人特有の氣難しさと、頑是なき子供の如き我儘を、時には仰せられるのであるが、作者は、慈母の子に對する態度を以て御看護申上げてゐる。御寢なされた夜中など、ふと御眠を覺まされた時の帝の御心淋しさを思つて、彼女は一人何時までも、帝の御枕頭に伺候するのであつた。帝も又作者の勞を、勞はらせ給ひて、大臣などが後から入つて來ると、おとゞが來た樣なる故注意する樣にとか、作者が帝の御側に添臥し奉つてゐる時、突然大臣が入つて來ると、そのまゝでゐるがよい、今朕が几帳を作つてやるからと仰せられて、御膝を高くして御隱し下される。このかしこくもやさしい御心は、崩御後も常に作者の感激を新にしてゐる所である。

御受戒後、定海阿闍梨を御枕頭に近く召しよせられ、「經誦して聞かせよ、定海が聲きかむも今宵ばかりこそきかめ」と仰せられて、涙に聲も出ない定海が、僅かによむ誦經をきかせられ、衆中之糟糠佛威德故去と云ふあたりより、「御聲うちつけさせ給ひて、露ばかり程とゞこほる所なく、ゆふ〳〵よませたまふ。御聲たふときあざりの御聲おしけたれて聞ゆ、あざりもとりわきて、そこをしも讀み聞かせ參らせらる、明暮一二の卷をうかめさせ給ふと、きゝおき給へる事なればなめり」のあたり、哀絕である。更に御臨終の描寫は、恐懼の極みである。作者はたゞ運命の前にひれ伏してゐる一個の人間の嚴肅な姿を見るのみである。これこそ人間の眞實の相に徹した作者の悲しみでなければならないし、また物狂ほしき迄伏し轉び泣けない作者の個性であらうし、先帝の御命日には、道の程誠に堪へ難げに降る雪の中をも、必ず香隆寺に參らねばゐられなく、折にふれ、事にふれ、先帝御追慕に涙した個性であらう。上卷は略〻こゝで終つてゐる。

作者は堀河天皇の崩御と共に、一時退出するのであるが、同じく十月頃、同輩よりの文によつて、白河法皇が作者の心持の世に稀なる事などを聞かせられて、新幼帝に參るべき由の御内意があつた事を知つた。先帝御追慕に日を暮してゐる作者は、あさましく、文を讀み違へたのかとまで思ふのであつた。この再び宮仕へする事に就いては、非常に惱み、無下に御辭退も出來得ないので思ひ餘つた結果、出家さへしようと考へるのであるが、自分で剃髪もならず、病を得て、それを口實にとまで願ふのであつたが、十二月の御卽位の褰帳の事に關して、どうしても作者が奉仕しなければならない事情に到つた。それは日記の語る如く、豫て褰帳を仕奉る事に定められてゐた大納言の乳母が突然亡くなつた爲である。この時の感想を作者は

日比はきゝすぐしてのみ過ぎつるをまゐらじと思ふなめりと心得させ給うて、おしあてさせ給ふなめりと思ふに、すべき方なし。

と云つてゐる。親族も强ひて勸める出仕であるし、飽くまで辭退すれば、我々にもよしなき事が、出來るかもしれない、などゝ話しあつてゐる中に、院宣が傳へられた。心に委せぬ憂身を歎じ、脫ぐべき時期も待たずに喪服を脫ぐ悲しさを味ひつゝ、出仕する事に意を決した作者は、自分の出仕を聞いて喜ぶ女房達を見て、怨めしく思はずにはゐられなかつたのである。十一月十九日、先帝御命日には、出仕の仕度に忙殺されてゐる上に、雪の恐しく降るにも拘らず香隆寺に詣でるのである。又卽位式に褰帳を奉仕し、晴れのお役を果しても、先帝御追慕の念に、正氣もなく我曹司に歸つて一人しをしと泣かずにはゐられない作者である。

新幼帝に仕へた作者は又、幼帝より特に愛慕せられた事が察せられるが、作者はこの幼帝をも、尊王とか、權威と

かに於てゞなく、現實のまゝ人の子としての姿に於て眺め、そこに限りなき敬愛の念を捧げてゐる。「ふれ〳〵こゆき」といはけなき御けはひにて仰せられる帝王、御夜具の中に、無心に御寢になつてゐられる幼帝、作者はぢつと心に哭いて御顏を見守つてゐるのである。帝は孤兒でいらせられたのであつた。

作者は幼帝に仕へて見るもの、聞くもの、凡て新しいのに、我身のみは昔ながらの身である事を反省しては、よろづの人達の、そのかみの人ならぬ中に、我ばかりありし昔ながらの人、いかに結びおきけるさきの世の契りにかと、物のみ思ひつゞけられて、あはれしのび難き心地す。

と記してゐる。

殊に、幼帝が、障子の繪を見せよ、と仰せられるので、作者はお抱きして、朝がれひの御障子の繪を御覽ぜさせて步いてゐると、

夜のおとゞの壁に、あけくれ目なれておぼえむとおぼしたりし樂を書て、をしつけさせ給へりし、笛のねの押れたるあとの、壁にあるを見つけたるぞ哀なる。

笛の音の押されし壁の跡みれば過にし事は夢とおぼゆる

かなしくて、袖をかほにおしあつるを、あやしげに御覽ずれば、心えさせ參らせじとて、去(さり)げなくもてなしつゝ、あくびをせられて、かく目に淚の浮たると申せば、みなしりてさふらふと仰せらるゝに、哀にもかたじけなくも覺えさせ給へばいかにしらせ給へるぞと申せば、ほもしのりもじの事思ひ出でたるなめりと仰せらるゝは、堀河院の御事と、よく心えさせ給へると思ふも、うつくしくて、哀もさめたる心地してぞゐまるゝ。

とあるには切々と人の胸を打ち來たる至情を感ずるのである。

要するに、作者は紫式部が夫宣孝の追慕に生きた如く、堀河天皇追慕に生きたと思はれるのである。

この日記は、諸傳本皆類從本系統を出るものなく、註釋と云ふも最近雜誌國語教育に玉井氏のものが揭載されたに過ぎない。これには一二の寫本の校合が加つてゐる。

昭和九年七月五日印刷
昭和九年七月九日發行

岩波講座 日本歷史
第十回配本 二

編輯者 國史研究會同人代表 黑板勝美
印刷兼發行者 東京市神田區一ツ橋通 岩波茂雄
印刷所 東京市神田區美土代町 三秀舍

寺島製本